



# 心不全患者のセルフモニタリングに関する評価尺度 の開発

服部, 容子

---

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2011-09-25

(Date of Publication)

2012-01-16

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5395

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005395>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要旨

専攻領域 看護学領域

専攻分野 看護実践開発学分野

氏名 服部 容子

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を( )を付して併記すること。)

心不全患者のセルフモニタリングに関する評価尺度の開発

論文内容の要旨 (1,000字～2,000字でまとめること。)

在宅療養生活を送る心不全患者の治療、管理において重要な要素の一つは、患者が体調の変化や心不全症状の出現を自ら管理し、病状増悪のリスクを軽減できるようにすることである。それに対し看護師は、心不全患者が自身による健康管理を行えるよう知識提供し、患者が自らの病状や運動耐容能に応じた日常生活を送ることができるよう支援している。患者の多くは、それを受けて心不全症状の出現に注意を払ったり、体重や血圧などの身体所見の変化を把握するなど、自らの健康管理を日々の生活で実践している。しかし、不十分な健康管理や病状増悪の兆候に対する気づきの遅れなどにより、再入院に至る患者は少なくない。そのため、患者自身による健康管理能力を向上し、心事故を防止できるようにすることが課題となっている。

入退院を繰り返す患者の健康管理能力を高めるには、一般的な留意事項に関する知識提供に加え、看護師が患者個々の自己管理方法や病状増悪の傾向を把握し、個別的な療養生活支援を実践することが必要である。そのような個別的な支援を開始するには、まず、患者が自らの疾病増悪に伴う兆候や身体的な感覚、日常生活活動の変化を定期的な観察する「セルフモニタリング」の様相を把握する必要がある。しかし、現在のところ、心不全患者のセルフモニタリングとは具体的に何を指すのが曖昧であり、その状況を把握する適切な手段は存在しない。そのため、患者の個別的状況に応じた療養支援をどのように実践したらよいかの模索が続いている。そこで本研究は、心不全患者のセルフモニタリングの概念を明らかにするとともに、心不全患者のセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by patients with Heart Failure: 以下、ESSMHFとする)を開発する

ことを目的とした。

まず、Rodgersらの概念分析法を参考に概念を特定した。31件の関連文献を分析した結果、心不全患者のセルフモニタリングは「良好なセルフマネジメントおよびQOLの改善を導くために、心不全に伴う身体症状の変化、身体活動の変化、体調管理の状況について自覚または測定し、その内容を解釈すること」であることが明らかになった。また、そのセルフモニタリングとは、身体症状の変化、身体活動の変化、体調管理の状況を捉えることであり、概念の属性は「自覚」、「測定」、「解釈」という3側面で構成されていることが明らかになった。この概念が明確化されたことにより、看護師はセルフモニタリングについて統一した見解を持つことが可能になるとともに、患者自らが健康管理方法を習得するような患者教育やカウンセリング場面で一貫した用語で患者に関わることが可能になると示唆された。

次に、明らかにされた概念を基軸として、外来通院中の心不全患者23名に対する半構成的面接を実施し、セルフモニタリング評価尺度案を作成した。尺度案は領域1と領域2からなり、領域1は患者がどのような視点で健康管理をしているのかを反映する22項目で構成し、セルフモニタリングの「自覚」と「測定」の様相を評価できるようにした。領域2は、患者が「自覚」「測定」した症状に対する理解状況を反映する16項目で構成し、セルフモニタリングの「解釈」の様相を評価できるようにした。それをもとに本調査を実施した。その結果、研究参加を依頼した167名中、152名から同意が得られ(回収率91.0%)、142名から有効回答を得た(有効回答率93.4%)。得たデータを探索的、検証的因子分析により精選し、領域1は6因子21項目に、領域2は4因子16項目に分類整理された。クロンバック $\alpha$ 係数は領域1で0.91、領域2で0.89の値を示し、級内相関係数は領域1で0.74、領域2で0.67の値を示し、内的整合性および安定性が証明された。併存妥当性の検討に用いた「ヨーロッパ心不全セルフケア行動尺度日本版(EHFScBS)」との間で算出した相関関係は、相関があると予測された項目で相関がみられた。具体的には、EHFScBSに含まれている水分摂取量の確認や体重測定などの「自覚」「測定」に関する項目と、ESSMHF領域1の類似項目との間に相関が見られた。また、EHFScBSに含まれている息切れや下肢の浮腫、倦怠感に関する「解釈」に関する項目とESSMHF領域2の類似項目との間に相関がみられ、併存妥当性が証明された。従って、ESSMHFは心不全患者のセルフモニタリングの様相を査定する上で、有効な測定ツールとなることが確認された。以上から、ESSMHFは心不全患者が行う健康管理の適切さや困難状況を把握する手段として活用可能であり、患者の個別的状況に応じた具体的な療養生活支援に役立つと考えられた。

指導教員氏名：宮脇 郁子 教授

## 論文審査の結果の要旨

氏名	服部 容子		
論文題目	心不全患者のセルフモニタリングに関する評価尺度の開発 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	宮脇郁子
	副査	教授	松田宣子
	副査	教授	法橋尚宏
	副査		
要 旨			
<p>本論文では、慢性心不全患者の健康管理能力を高めるための効果的な療養生活支援に資するために、患者が自らの疾病増悪に伴う兆候や身体的な感覚、日常生活活動の変化を定期的に観察する「セルフモニタリング」の様相を把握するための「心不全患者のセルフモニタリング評価尺度」を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを研究目的とした。尺度案の作成に際して、心不全患者のセルフモニタリングの概念分析を31の文献を用いてRodgersらの方法によって分析し、属性として「自覚」「測定」「解釈」という3側面で構成されていることを明らかにした。次に概念分析の結果をもとに、23名の心不全患者を対象に半構成的面接を行い、3つの概念から構成する尺度案を構成し、142名の心不全患者を対象として、信頼性と妥当性の検討を行った。得られたデータを探索的、検証的因子分析により精選した結果、領域1は6因子21項目に、領域2は4因子16項目に分類整理された。クロンバック<math>\alpha</math>係数は領域1で0.91、領域2で0.89の値を示し、級内相関係数は領域1で0.74、領域2で0.67の値を示し、内的整合性および安定性が検証され、心不全患者の療養支援に資する独創的な評価尺度であることが認められた。なお、併存妥当性に用いた尺度の項目選択や、カットオフ値の設定、ならびに臨床応用における有用性の検討など課題が残されているが、総合的に判断し、本論文の新規性とその意義から博士(保健学)の学位を得る資格があると認めた。</p>			
<p>掲載論文名・著者名・掲載(予定)誌名・巻(号)、頁、発行(予定)年を記入してください。  Development of an Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure・Yoko Hattori, Chiemi Taru, and Ikuko Miyawaki・  Kobe Journal of Medical Sciences・Vol.57, No.2, 2011(in press)</p>			